

中国戦線に形成された日本人町

——従軍慰安婦問題補論——

倉 橋 正 直

はじめに

「駐留部隊と在留日本人商人との「共生」——満州国熱河省凌源県の事例」(『愛知県立大学外国語学部紀要』四一号、二〇〇九年三月。以下、前稿と称す)で、私は、熱河作戦後の一九三五年ころ、満州国熱河省凌源県城にやってきた日本人商人を分析した。その結果、売春を頂点とするさまざまなサービスを兵士たちに提供することで、軍に代わって、彼らが兵士の福利厚生を担当したという仮説を提起した。熱河作戦に続いて起こった日中戦争の時、どうだったか。これが本稿の目的である。

第一章 日本人町の形成

外務省調査部編『海外各地在留本邦内地人職業別人口表』(復刻版。不二出版、二〇〇二年)によれば、日中戦争以前の一九三六年、中国(満州国・関東州・台湾および香港を除く。以下、同じ)在留日本人は五、九万人であった。

また、中国（前述の範囲）からの戦後引揚者は四九万人であった（朝鮮人・台湾人を含まない。厚生省援護局編『引揚げと援護三十年の歩み』、一九七七年、六九〇頁）。朝鮮人・台湾人を加えれば、六〇万人以上になるであろう。八年間の日中戦争で、中国在留日本人は約八倍に増えている。

これを、太平洋戦争期の東南アジアおよび太平洋の島嶼と比較してみる。東南アジア在留日本人は戦前（一九四〇年）、四、六万人であった。戦後の引揚者は八、五万人であったから、三年八ヶ月の太平洋戦争で約二倍になっている。東南アジア方面への日本人の移住の勢いは、中国戦線に比べると弱かった。また、太平洋の島嶼は、約二五〇〇人から二、八万人と、一倍に増えている。増加率は高いが、しかし、絶対数は小さい。

最終的には六〇万人規模に膨れ上がった在留日本人（朝鮮人・台湾人を含む）の全部が都市部に居住した。在留日本人は占領者の一部であって、中国人と敵対的な関係だったから、雑居できなかった。日本人だけで集中して住んだ。結果的に中国の占領地域の多くの都市に日本人町が形成された。都市の中にいさえすれば、治安は良好であった。また、日本語だけで暮らせた。

東亜同文会編『第七回新支那年鑑』（一九四二年八月）は、一九四一年四月一日現在で、一八七の日本人町をあげている（一〇九頁）。この場合、一〇〇名以上と限定しているので、それ以下を含めれば、日本人町は二〇〇を優に越えていた。

日本人町の規模はさまざまであった。前掲、東亜同文会編『第七回新支那年鑑』によって示された一八七の日本人町をその人数で分けてみると、一〇〇～五〇〇人が六一%、五〇一～三〇〇〇人が二九%、三〇〇一人以上が一〇%となる。この時点で三〇〇一人以上も在留日本人がいた大規模な日本人町は全部で一九あった。次にそれらの町をあげておく。

石家荘の場合、日本人町は「駅の東方に新しく」つくられた。このように、既存の中国の都市の一角に日本人は集中して住んだ。

「邦人・物凄き進出（中略）かつて邦人の影を見なかった石家荘にさへ六千人以上の邦人が押し出して、駅の東方に新しく日本人街をつくり上げ、美容院もあれば産婆さんもゐる。軒下に『仕立もの致します』の札がぶら下がっている。日本人小学校から愛国行進曲の可愛い合唱が聞えてくるといふ光景だ。」（『東京朝日新聞』、一九三九年二月七日）北京には、上海と並んで最大の日本人町が形成された。最終的には約一〇万人の日本人が移り住んだから、「もう内地にあるもので、北京にないものは殆どない。」というような状況が出現した。

「北支の現状 邦人進出著し 小学生、一日に七人増加（中略）邦人の商売人層も易者、代書人、軽便大工、古綿打直し、海苔専門店、無尽会社、扇子団扇製造業、広告社からネオン看板屋と、商売往来に見当らぬものまで出来て、もう内地にあるもので、北京にないものは殆どない。この居留民の激増のため住宅難を招き、」（『東京朝日新聞』、一九三九年七月一日）

次は山西省太原である。日本語で買い物ができるように、日本人専用の市場を作っている。

「住むには房屋管理委員会が出来て家屋処理対策が確立し、又物資の需給、物価の調整、輸送の統制も、物資対策委員会が組織されて順調にゆき、去る三日には日用食料品を廉売する邦人市場も開設されて、おぼろ覚束ない支那語で苦勞する奥さんたちの買ひ出しに一つの福音がもたらされた。」（『東京朝日新聞』、一九四〇年一月九日）

このように中国戦線に多くの日本人町が形成された。バラバラに暮らしていたのでは、安全を守りきれなかったから、防衛上、在留日本人は密集して住まざるを得なかった。狭い空間に彼らはゴチャゴチャと暮らしていた。家屋を日本式に立て直すほどの余裕はなかったから、それまでの中国式の家屋に、やってきた日本人はそのまま移り住んだ。

だから、外観は従来の中国の町と大きく変わらなかった。しかし、家の内部は改造した。日本人は中国に移住してきても、自国の生活習慣を容易に変えようとしなかった。椅子・テーブル・寝台を使う中国人の生活様式になじめず、タタミを敷いた日本式の生活に固執した。在留日本人の人数に比して、タタミ屋が多かった所以である。

基本的に軍に「ぶら下がって」生活を立てているという日本人町の事情から、飲食店や旅館などのサービス業が多かった。日本語で書かれた看板がそこかしこに掲げられていた。日本語がとびかい、和服姿の女性が多く目についた。日本内地の下町の雰囲気になじっていた。不思議な空間が中国の都市の一角に突如として出現した。日本人町は内地の町をいわば凝縮して再現していた。たしかに内地の町とよく似た雰囲気はただよっていた。実際、多くの日本人がそこに暮らしていた。しかし、本当の日本内地の町とはどこか違っていた。いつてみれば、映画のセット、あるいは芝居の書割の類であった。どこか、ウソっぽいところがあった。日本内地の町に似ていたけれども、しかし、決して内地の町そのものではなかった。

日本人町は日本軍の軍事力だけに支えられていた。それが失われれば、ただちに跡形もなく崩壊すべきものであった。こういった日本人町が、ほぼ八年間、華北を中心にして、大小とりまぜて二〇〇以上、存在した。

第二章 日本人町形成の理由

敗戦後のアメリカ軍の占領時代、アメリカの民間人は大量に日本にやってこなかった。軍事占領地に敵国から大量の民間人がやってくるという現象のほうがむしろ珍しかった。この現象こそ日本軍隊の特殊性からきていた。日露戦争の時からすでに外国遠征の軍隊に民間人がくっついてきて、商売をする伝統があった（拙稿「従軍慰安婦前史――

日露戦争の場合」、「歴史評論」四六七号、一九八九年三月）。

日本軍の伝統な軍事思想では、兵站を軽視した。また、一人一人の兵士を大事にしなかった。他の国の軍隊ならば、軍みずからが兵士の福利厚生の面倒を見た。ところが、日本軍の場合、軍はそれをなおざりにする。代わりに戦地にやってくる日本人商人にそれをやらせた。彼らは軍属ではなく、全くの民間人であった。だから、軍から命じられてやってきたのではなく、自らの意志で戦地にやってきた。もうかりそうだと判断したから、やってきたのである。軍の側はタテマエでは民間人の流入を無視した。しかし、実際には彼らの到来を歓迎し、種々の便宜を供与した。

中国には以前から日本の租界があり、多くの日本人がそこで暮らしていた。だから、中国には土地カンがあった。土地になじみがあるので、出てゆきやすかった。また、当時、日本は中国東北地方（満州）に次いで、「北支」、すなわち華北をねらっていた。それを「北支」の特殊化といった。一部の日本人には、華北は中国東北地方に続く第二の「約束の土地」と見えたことであろう。華北は、「満州国」から地理的にも近かった。そういった事情から、いち早く華北の占領地に乗り込み、既得権を主張して、その後に備えようと図るものもいた。

日中戦争は日本の歴史始まって以来、未曾有の大戦争であった。八年間も続き、戦域も広大であった。ほぼ一〇〇万の大軍がずっと展開し続けた。一方、一九三八年一〇月の武漢攻略以降、日本軍は外延的な攻勢を控える。以後、占領地における対ゲリラ戦（八路軍相手）が次第に戦争の中心になってゆく。日本軍が占領地の拡大よりも、むしろ占領地の実効支配のほうに重点を置いたことから、敵味方を区切る戦線は比較的安定してくる。太平洋戦争になり、やがて戦いが日本側にとって不利になっていっても、中国戦線はほぼ安定していた。その結果、日本人町の大部分はそのまま、終戦の日を迎えた。

日本内地では長期戦に合わせて、次第に統制経済に変わってゆく。一部の業種は強制的に廃業させられた。転業民

の一部は満蒙開拓団として中国東北地方に渡っていった⁽²⁾。別の一部はツテを求め、中国戦線に向かった。彼らは中国の日本人町で、内地にいた時と同じ商売を続けた⁽³⁾。

次は女給の例である。「特殊飲食店従業員」とあるので、売春婦の一つのタイプと理解する。「東京全市で約一万五千人の女給さん」が強制的に減らされている。急に新しい仕事につけといわれても難しかった。だから、彼女たちの一部は、中国戦線にある日本人町に出かけ、今度は兵士を相手にして、女給の仕事を続けたことであろう。

「消ゆる女給一万五千人（中略）特殊飲食店従業員——女給さん達は何処へ行く（中略）そして銀座二百五十軒の店から二千人を残して約五千四百名、東京全市で約一万五千人の女給さん達が新たに国策に順応した生活戦線へ——または家庭の人——銃後婦人として健実な第一歩を踏み出す。」（『朝日新聞』、一九四〇年九月五日）

また、日本人町には朝鮮人・台湾人もいた。戦時下、植民地では内地以上に生活は逼迫した。彼らはやむなく中国戦線の日本人町に流れてきた。朝鮮人は華北に、台湾人は華南に多かった。

次にこの状況を太平洋戦争期の東南アジアと比較してみる。外国遠征の軍隊に商人がついてゆき、兵隊の福利厚生を担当するという伝統、および、統制経済下、一部の業種が強制的に廃業され、廃業民の一部がやむなく、日本軍の占領地域に向かうという二点は、中国戦線の場合と同じであった。しかし、①戦争の期間が三年八ヶ月と短かった。②日本軍の優勢は初めの一年間だけであって、一九四三年初めのガダルカナル戦以降、ずっと劣勢に陥った。③戦線は安定していない。とりわけ、太平洋の島嶼は次々とアメリカ軍に奪われていった。④租界がなく、日本人には地理的に遠くて、なじみが薄かった。

こういった状況から、太平洋戦争期、東南アジアの戦地にやって来る商人の数が不足した。軍が強制的に一定数の商人を戦地に連れ出すという形を伝統的にとっていなかったもので、この時、急に日本人商人を強制的に連れてくるわ

けにはゆかなかった。その不足が、この地域における兵士たちの福利厚生に不十分さを生じさせた。セックスの面では、性的奴隷型の従軍慰安婦を多く生み出した。

第三章 日本人町の経済

日本人町の日本人は一般に中国語が話せなかったから、周囲にいる多くの中国人を相手に直接、商売できなかった。日本語のわかる中国人の店員を雇うか、あるいは中国人小売商に卸し売りするような形態でしか、中国人相手の商売はできなかった。勢い、商売の相手は日本軍の将兵、および在留日本人に限られた。いわゆる「とも食い」であった。

広東・済南・開封の三つの日本人町の『商工案内』がある。⁽⁴⁾これには、個々の店の名前、住所、経営者の名前、および電話番号が掲載されている。『商工案内』という性格から、経営者の氏名だけであって、従業員の名前はのっていない(図1)。当時の日本人町のような具体的を示してくれる。

次は最も詳しい開封(河南省)にあった日本人町の紹介である。⁽⁵⁾七〇〇〇人の住民がいた開封は大規模な日本人町の例になる。人口七〇〇〇人のうち、朝鮮人が約三割を占めている。男女比は五五対四五であって、女性の割合がけっこう多い。朝鮮人の場合、女性のほうが多い。職業から見れば、日本内地の町と変わらない。前述したように、中国人が建てた家屋をそのまま使うが、しかし、内部にはタタミを敷いた。そこで、タタミ屋が繁昌することになった。開封の場合も、タタミ屋が五軒あった。

兵士は甘いものに飢えていた。日本人町には彼らの需要に応えるために、菓子屋がめつばう多かった。ここでも和洋菓子屋が二三軒もあった。また、写真館に人気があった。兵士は自分の元気な様子を写真にとり、それを内地の家

[illegible]

族のもとに送りがつたからである。開封の場合も、写真館が一八軒、写真の機材を扱う店が二軒もあった。自転車販売が一五軒もある。日常の移動手段として、自転車が多く使われていたのである。

七〇〇人もいると、葬儀社が必要になるということであろうか。屎尿^{しりょう}処理も商売となったので衛生社が二軒あった。このような形で日本人町の都市機能の一部を補っていた。料理店が三三軒、カフェが一二軒、飲食店が八一軒——これらの店が飲食と売春で、将兵のリフレッシュに当たった。髪結い五軒、洋服仕立て七軒、和洋服仕立て三軒、洋服店七軒、呉服八軒などは売春婦を主な顧客としていた。

前稿で述べたように、在留日本人商人のおかげで、長い外征に倦みつかれた兵士たちは時々、町に出て来て、心身のリフレッシュすることができた。兵営にある風呂は狭くて汚かった。民間が経営する銭湯の湯船は広く、清潔で気持ちよかった。彼らは日本式の風呂に入り、くつろぐ。清潔なタタミを敷いた部屋でゆっくり休息する。兵営の食事は単調でまずかった。時にはうまい飯を食いたかった。彼らは商人の経営する料理店にゆき、おいしい日本料理を食べた。また、時には酒を飲んでドンちゃん騒ぎをして、ウサを晴らした。さらに日本人（朝鮮人を含む）売春婦とセックスもした。これらの費用は、すべて軍から支給された軍票で支払った。

駐留部隊の兵士を接待することで日本人町の商人たちは潤った。兵士を相手にすることで、売春婦たちも稼ぐことができた。明日の命もわからない兵士たちの金使いは荒かった。気前がよかったから、荒稼ぎが可能であった。売春婦は商売柄、美しく装う必要があったから、衣服（和装・洋装）を買って着飾る。髪結いさんに髪も結ってもらわねばならない。このように彼女たちが購買してくれるので、呉服屋・洋服屋・はきもの屋・髪結いなどが生活できた。将兵が直接消費する飲食関係、また、将兵を相手にすることで収入を得た売春婦たちが消費することを前提にして成り立つ店が、町の中心となった。

商人は兵士を最大の顧客として商売した。駐留部隊に直接的に「ぶらさがって」生計を立てた。日本人町の商人は兵士の福利厚生を担当した。彼らのおかげで、兵士はリフレッシュできた。このように将兵と在留日本人商人は「共生」関係を取り結ぶ。小規模な日本人町ほど、両者の「共生」関係がわかりやすかった。

中国戦線には、ほぼ一〇〇万の日本軍が展開していた。それに対して、在留日本人は朝鮮人などを含め六〇万人であった。一〇〇万の軍隊に「ぶら下がる」には、六〇万人もの在留日本人は多すぎた。そこで、大規模な日本人町の場合、ある程度の経済活動がなされた。この場合、周囲に駐屯している個々の部隊ではなく、むしろ戦争全体に「ぶら下がつて」生計を立てている感じになった。

戦前から上海や青島には在華紡（綿織物工場）があった。中国人労働者を雇って綿織物を生産していた。鉱山も経営していた。また、山東省において、日本資本は米國綿花を中国人農家に栽培させていた。占領地の運輸交通手段も掌握していた（華北交通）。日本軍の占領下、こういった日本資本が活動を再開した。

このように、日本人町に移り住んだ商人は彼らなりに懸命に増収を図った。しかし、日本人町は全体としては赤字であつて、経済的に自立できなかった。結局、陸軍は一〇〇万の遠征軍を長期にわたって養うだけでなく、それに付随する約六〇万人の在留日本人（朝鮮人・台湾人を含む）の生活まで面倒を見なければならなかった。その経済的負担は限りなく大きかった。占領支配の収支は大幅な持ち出しとなった。

いま風にいえば、人件費に陸軍の予算の大半が取られてしまう。こういった事態はボデイブローのように、ゆっくりだが確実に陸軍の財政を逼迫させてゆき、結果的に兵器の改良・近代化に回せる金を少なくさせた。日中戦争期、陸軍は世界レベルに並ぶ優秀な戦車や軍用機を作っていない。日本の工業力の相対的な低さだけが問題ではなかった。なぜなら、ほぼ同じ時期、海軍のほうはゼロ戦のような優秀な戦闘機を作っているからである。陸軍も本当は兵器を

改良しなかった。しかし、ない袖は振れなかった。結局、兵器の改良の代わりに、精神主義が鼓吹された。現在から見れば、当時の日本陸軍の非合理性には目を覆わせるものがあつた。中国側のねばり強い抗戦が、こういった事態を招いたのであつた。^⑥

第四章 日本人町における売春婦

慰安婦収容所のような、殺伐とした施設の存在は、日本人町に関する資料から出てこない。日本人町における売春婦は、当時の日本内地にあつた売春婦と同じ名前であつた。明治初年以降、売春関係の女性には芸妓・娼妓・酌婦の三つに分類された。芸妓は高級売春婦であつた。娼妓は公娼制度下の売春婦であつた。前借金（ぜんしやくきん）に縛られ、廃業の自由がなかった。居住の自由もなく、伝統的に遊廓に監禁された。また、遊客も選べず（拒めず）、最も悲惨な境遇に置かれていた。酌婦は私娼のことである。彼女たちは廃業や居住の自由を持っていた。また、遊客を選ぶこともできた。三者は法律上の扱いも違つたが、税金も違つていた。一九〇五年の関東州の場合でいえば、毎月、芸妓七円、娼妓五円、酌婦二円五〇銭であつた「一九〇五年一〇月、関東州民政署令第七号、関東州雑種税規則」。

明治末年にいたつて、女給という新しいタイプの私娼が出てくる。彼女たちはカフェーを売春の場としていた。したがつて、カフェーにはコーヒー店と売春の場という二つの意味があつた。^⑦日本人町の官製の自治組織である居留民団（あるいは居留民会）は、こういった芸妓・酌婦・女給の三者から賦課金を徴収した。その賦課金の額には違いがあつたはずである。

日本人商人は内地から勝手に中国戦線にやつてきた。軍は放任主義をとり、民間人の流入に干渉しなかった。日本

人町はいわば自然発生的に形成された。こういった事情から、日本人町があらゆる面で内地の町そっくりになるのは自然であった。しかし、前述の芸妓・娼妓・酌婦および女給の4種の売春婦がそのまま存在したのではなかった。

一九〇九年十二月、関東州では娼妓の名目を廃止し、酌婦に変えた「公娼制度の名目上の廃止」。当時、シベリア鉄道はアジアとヨーロッパを結ぶ世界交通の大動脈であった。そのシベリア鉄道に接続する満鉄が関東州を通っていた。廃業や居住の自由を持たない、みじめな娼妓の実態を欧米人に見せたくないという配慮から、この処置が行われた。遊廓も名目上、なくした【拙稿「満州の酌婦は内地の娼妓」、『愛知県立大学文学部論集（一般教育編）』三八号、一九九〇年二月】。中国戦線の日本人町にも、この伝統が踏襲された。だから、日本人町に遊廓はなかった。北京や上海には一〇万人もの日本人がいたのであるから、物理的に見れば、遊廓を十分作れた。しかし、国際的な評判を気にして、遊廓を作らなかった。とにかく日本人町には遊廓はなく、また、娼妓は一人も存在しなかった。

前掲、外務省調査部編『海外各地在留本邦内地人職業別人口表』に「細分類」という欄がある。在留日本人の職業を、全部で六〇項目に分けて記している。その第三四項目は「旅館、料理、貸席及び芸妓業、遊戯場、興業場」、第三五項目は「芸妓、娼妓、酌婦其他」である。前者は売春に関係する業者を多く含んでいる。後者は売春婦そのものである。なお、数字は合計であって、それぞれの内訳はわからない。すなわち、「芸妓、娼妓、酌婦其他」の各項目の人数はわからない。

日中戦争以前の一九三六年一〇月で、中国在留日本人のうち、第三四項目は五四七人、第三五項目は二五二七人であった。最も新しい統計は一九四〇年になる。それ以降は統計がない。一九四〇年一〇月で第三四項目は五〇五八人、第三五項目は一五〇四一人である。一九三六年から一九四〇年の四年間に、売春関係業者は九・二倍、売春婦は六・〇倍に増えている。両者の具体的な数字の推移からも、日本人町にやってきた売春関係業者と売春婦の増加傾向がわ

かる。

中国戦線の日本人町にいた売春婦のことを扱うに当たって、一番やっかいな問題は、前述した娼妓の名目を使えないことから来ていた。すなわち、実態は娼妓にもかかわらず、芸妓・酌婦・女給のいずれかを名目上、名のついていた女性が少なからず存在したことである。前稿で、中国吉林省档案館所蔵の満州中央銀行資料から、この問題に関連する史料を紹介した。それを再掲する。

「四、邦人料理店方面 各料理店共に好景気を呈し、一流料理店に在りては、一日百五十円平均、内、芸酌婦稼高四割、酒肴揚高六割なり。（後略）」（一九三四年一月一日、中島在赤峰領事館警察署長、赤峰警高発第五四号、『赤峰経済事情報告』）

日本は一九三三年三月の熱河作戦で当時の熱河省を占領し、満州国の版図に組み込んだ。赤峰は熱河省のやや北部にある町で、とくに阿片の集散地として有名であった。史料は占領から、まだ一年も経っていない時期のものである。赤峰の町では、料理店が事実上、売春の施設であった。

日本内地で娼妓（公娼）と売春業者（抱え主とか楼主ろうしゅといった。法律上の名称は貸座敷業者かじぞきやうしやという。）との取り分の比率は、多くの場合、四対六であって、売春婦の取り分は四割であった。赤峰の場合も、これと同じ比率で分けている。すなわち、「内、芸酌婦稼高四割」とあるのは、芸妓・酌婦の取り分は四割だという意味である。そして、「酒肴揚高六割なり」は、酒肴を遊客に提供する売春業者（料理店経営者を兼ねている）の取り分は六割だと述べている。売春業者は、娼妓に遊廓内に住む所、寝具、および、食事（ただし、通常は二食のみ。夕食は遊客から提供されることを前提にしていた。）を提供した。娼妓の生活の一定部分を保障したから、遊客が支払った売春の代金の六割を受け取ることができた。

史料では「芸酌婦」とある。すなわち、芸妓と酌婦である。芸妓と酌婦はともに私娼である。だから、本来の芸妓と酌婦は独立して売春を稼業として営む。特定の売春業者と経済的な関係を取り結ばない。だから、彼女たちは遊客が支払った代金を全部、自分で受け取ることができる。ところが、史料が示す赤峰の「芸酌婦」の場合、四割しか受け取っていない。だから、彼女たちは名目上、芸妓・酌婦と称しているが、その実態は娼妓であつた。この資料は一九三四年一月であつて、日中戦争より三年半前の満州国熱河省のようすを伝えている。日中戦争の時のものではないが、名目上、芸妓・酌婦と称しているけれども、その実態は娼妓であつたという事例として紹介しておく。

次の史料から、山西省大同に出かけた芸妓、酌婦、女給の具体的な人数がわかる。ある特定の日本人町に出かけた売春婦の内訳まで示す史料は珍しい。宗教団体（救世軍）の機関紙ということで、多少、検閲が甘くなつたのかもしれない。

「支那山西省の大同は、同省第二の都会といはれてをり、近くに有名な石仏寺がある。支那事変前は、日本人はたった一人、満鉄社員がゐただけであるが、今では四十九世帯二百九十人の邦人がゐて、その中の三十人は芸妓、六十人は酌婦、四十人は女給で計百三十人。尚その中には半島人酌婦五十三人、女給一人であるとのこと。」（『ときのこと』、一九三八年一月一五日）

芸妓三〇人、酌婦六〇人、女給四〇人、合計一三〇人と、名目はきれいに分かれているが（娼妓が一人もいないことを確認せよ）、その大部分の実態は、前借金でしばられた娼妓であつたと私は推測する。また、朝鮮人の比率が高く、四割を占めている。

次の史料が示すように、日本軍の占領直後に四〇名ほどの民間人が山西省太原に入っている。

「躍進する太原（中略） 事変勃発の年、皇軍入城後、相集つた同胞は僅か四十名程だつた。その人々によつて日

本人倶楽部が組織されたのだったが、今では在留邦人は一万五千二百名（内、男九千百）となり、「（『東京朝日新聞』、一九四〇年十一月九日）

彼らは、売春業者、および彼らに連れられた売春婦たちであつたと推察する。彼らが、進撃する軍隊のすぐうしろに追隨して、民間人としては占領地に一番乗りする事例はしばしば見られた。こうした荒っぽいやり方は、たしかに多少危険だったが、しかし、荒稼ぎもできたからである。

また、次の史料は、「若い女を十数人置いてやる水商売等々は、当たればボロい商売である。」と率直に述べている。この場合、十数人の若い女と、水商売の経営者との関係が問題である。

「何んと云つても当るのは、食ひ物商売である。やれ戦争だ、やれ支那兵だと云ふときには、梅干と握飯で飢えを凌ぐ兵隊さんでも、後方に居るときは矢張り人間である。天婦羅も喰ひたいし、日本酒を刺身か何かで一杯やりたくなる。これが人情であるから、料理屋だとか、飲食店だとか、或ひは宿屋、余まり勧められないが若い女を十数人置いてやる水商売等々は、当たればボロい商売である。」（高木陸郎編『北支経済案内』、一九三九年、今日の問題社、三二二頁）

彼女たちが実質的にも私娼だつたならば（名目は芸妓・酌婦・女給のいずれでもよい）、独立して売春を稼業として営むものであつて、特定の業者と経済的な関係を取り結ばなかつた。一人で売春をして、遊客が払った金はすべて自分のものになつた。業者がそこに立ち入る余地はなかつた。この場合、業者は中国戦線にある日本人町まで彼女たちを案内して連れてゆく、単なる引率者に過ぎなくなる。それでは、利益はたいして期待できず、商売としてうまくに欠けていた。だから、このような事例はほとんどなかつたと思われる。

多くの場合、売春業者はまゑもつて彼女たちの親たちに一定の金を、前借金として前渡しする。彼女たちは売春で

稼いで、その借金を返済するというしくみであった。だから、彼女たちは実質的に娼妓であった。ただ、日本人町には日本内地にあるような遊廓は存在しなかったから、彼女たちを監禁しておけなかった。居住の自由はほぼ保障された。その実態が娼妓であった若い娘を十数人、戦地に連れてゆく。そうすれば、売春業者は彼女たちを搾取することができ、その利益は相当大きかった。この時、彼らは公娼制度下の売春業者、すなわち法律用語でいえば、貸座敷業者に実質上、なっていた。

日本人町における売春婦のようすは千差万別であった。一般的に言えば、高級売春婦たる芸妓は料理店（料理屋）、酌婦は飲食店や料理屋、女給はカフェーを、それぞれ売春の場としていた。遊廓がないことだけは違うが、あとは日本内地と同じであった。兵士たちは内地の場合と同様に、これらの売春の場に出かけ、思い思いに（可能ならば、好みの）女性を求め、セックスした。ただ、将校と兵士には収入の差が厳然とあったから、兵士は高級な料理店にはゆけなかった。

「彼らの女房」という用語で、特定の兵士となじみになった売春婦のことを呼んでいる（松井真吾「娘子軍出征」、『犯罪公論』、一九三三年四月号）。戦地においても、心を通わせられる女性ができる場合があった。兵士のリフレッシュ効果を考えるならば、こういった関係ができるようなしくみのほうが望ましかった。

日本人町の売春婦について述べてきた。それをまとめれば次のようになろう。すなわち、日本人町にいた売春婦は、名前だけでなく、その性格も日本内地の売春婦と同じであった。ただ、娼妓の名称はなく、遊廓も作られなかった。日本人町の売春婦は芸妓・酌婦・女給と名のついていたが、その実態はほとんど娼妓であった。名前通りに、私娼の実態を持つものは少なかった。

前述したように外務省の統計は、一九四〇年に中国戦線の日本人町に約一・五万人もの売春婦がいたことを示して

いた。彼女たちの数は、その後も増加していった。兵士たちは順番に近くの日本人町に出かけ、在留日本人の商人から、売春を頂点とする各種のサービスを受けた。セックスの面でいえば、日本人町の売春婦が果たすリフレッシュ効果は大きく、兵士たちから歓迎された。後述するように、それは性的奴隷型の従軍慰安婦の比ではなかった。

一方、性的奴隷型の従軍慰安婦も少数ながら存在した。彼女たちは日本人町には居住しなかった。軍の管理下に置かれ、別の所に隔離された。したがって、在外公館（領事館）の管轄外にあった。だから、彼女たちは、外務省が作成する在留日本人の人口統計に入っていなかった。こういった事情から、具体的な人数も不明である。

第五章 日本人町のリフレッシュ効果は絶大

ベトナム戦争の時、アメリカはタイのバタヤ・ビーチに一大歓楽境を作る。そこに、南ベトナムの戦場から、兵士を駆逐艦で次々と運んできて、休息させた。バタヤには、食い物屋、酒場、クラブ、賭博場、映画館、病院、教会など、アメリカ人兵士が伝統的に好むものが、なんでも豊富に用意されていた。たしかに、こういった「歓楽境」に連れて来られれば、兵士たちはある程度、リフレッシュできた。しかし、兵士たちが潜在的に求めるものは、もっと多様であった。おいしい食い物、酒、セックスだけで、苛酷な戦場で被った心身の消耗を回復できたとは思われない。それでは、兵士たちが切実に求めたものはないか。彼らは、たとえ一時的であっても、本当はなつかしい我が家に帰りたいかった。長い外征に倦みつかれた兵士たちが潜在的に求めたものは、内地の我が家への一時帰休であった。それが兵士をリフレッシュするための最善の策であった。しかし、当時の日本の国力をもって、一〇〇万人の兵士を一時帰休のために内地に送り出すことはできなかった。そこで、次善の策として、戦場の近くに「内地の我が家」によ

く似たものを準備し、そこに順番に兵士を送り込む方式を考え出す。この方式ならば、可能であった。要するに、やすうに兵士のリフレッシュをはかる方策であった。

日本人町は二〇〇以上もあった。これを、数百人程度の小規模なものと、数千人から一〇万人に達する大規模なものに分けて考えることにする。まず、小規模な日本人町の場合、パタヤの町が果たしたのと基本的に同じ役割を果たした。これを「歓楽境」路線といっておく。兵士たちに、おいしい食い物、酒、セックスなどを提供した。商人は、こういったもので兵士たちを直接的にねぎらった。町の規模が小さかったから、実際、これぐらいしか提供できなかった。こういったサービスを提供されて、兵士たちはある程度、リフレッシュできた。しかし、そのリフレッシュ効果は限定的であった。

次は大規模な日本人町の場合である。三〇〇一人以上の規模を持つ日本人町が一九あった。この場合、上述のパタヤが持った歓楽境の要素に加え、日本内地の町を中国戦線にほぼ再現したという効果もあった。やってきた兵士は、飲食・セックスのサービスを受けるだけではなかった。それに加え、あたかも内地の町に戻ったような感じを持ちえた。兵士は軍服を着用しているので、町の住民にややとけ込みにくかったかもしれない。それでも、日本人町をぶらぶら散歩し、住民に声をかけ、世間話をすることはできた。内地の商店と変わらない商店に行き、買い物を楽しむこともできた。内地から各種の宗教団体が日本人町に進出してきていた。だから、宗教心を持つものは、お寺・神社・教会に行つて、それぞれの宗教者の説教を聞き、祈ることもできた。読書が趣味なものは、書店に行き、評判の本を買つて、読むこともできた。占いを見てもらうものもいた。附属の日本人小学校に行つて、児童たちが校庭で元気に遊んでいるのを見れば、内地に残してきた自分の子どものことを思い出したことであらう。歯痛に悩むものは歯医者に行つて治療してもらえた。映画館に入り、日本の映画をみることもできた。

日本人町では、ごく普通の日本人が内地にいた時と同じように様々な職業に従事していた。そこには市井に暮らす、普通の人々の生活があった。兵士たちは、今は召集され、兵隊として外地で戦わされているが、つい数年前まで内地のとある町や村で、彼らと同じように働いていた。召集される以前の、彼ら自身の数年前の生活が目の前にあった。こういう環境に親しく身を置く。猥雑な都市機能が全体として働き、種々の側面から兵士の心を癒した。苛酷な戦場にいることを、つかの間であっても、忘れることができ、リフレッシュ効果は大きかった

戦場近くに内地の町とよく似た日本人町が再現された。そこにゆけば、兵士は一時的に内地の町に帰ったような感じが得られた。日本人町（とりわけ、大規模な日本人町）が、兵士のリフレッシュに果たした効果は大きかった。その効能をいくら強調しても、強調しすぎることはあるまい。それだけの意義を持っていた。パタヤより、日本人町のほうが兵士の心身のリフレッシュに対して、はるかに有効であった。

もし仮に、パタヤにアメリカ民間人を一万人程度連れてきて、アメリカにいた時と同じように生活させたとする。リトル・アメリカをパタヤの町に作るのである。北京・上海並みの一〇万人ではいかにも多すぎるので、せめて一万人としておく。アメリカで商売を営んでいたものは、パタヤで同じように商売させる。南ベトナムの戦場からやってきた兵士たちは、もっと効果的に癒されたことであろう。アメリカに一時、戻ったような感じが得られたからである。「歓楽境」路線だけよりも、癒しの効果はもっと大きかった。一方、一万人のアメリカ人を連れてきて、パタヤの町で生活させるのに要する費用に思いを致すと、その財政的負担の大きさに困惑してしまう。しかし、日本人町の規模は、その六〇倍もあった。いかに大きな負担になっていたかが理解されよう。

商人は内地から中国戦線の占領地に移住してくる。なるべくならば、内地で生活していた時と同じ職業を営み、暮らしてゆきたい。中国戦線の占領地に形成された日本人町は、限りなく内地の町に近いものになった。こうして、兵

士が潜在的に求めたものと、在留日本人の存在形態がたまたま一致する。以前、このような一致はなかった。在留日本人の数が少なかったから、それ以前には日本人町を作れなかったからである。しかし、日中戦争にいたって、戦争の規模がこれまでにないほど拡大したこともあって、はじめて可能になった。結果的に、日本はすばらしいシステムを作り上げた。しかし、欠点も当然あった。日本人町を維持するために、とにかく莫大な金がかかったことである。

性的奴隷型の従軍慰安婦と、日本人町に多くいた売春婦型の従軍慰安婦——どちらが兵士から好まれたか。また、どちらのほうが兵士に対してリフレッシュ効果をより多く発揮したかである。

性的奴隷型の女性たちは、だまされたり、あるいは強制的に(首に縄をつけられて、自らの意志に反して、(おそらく)朝鮮から中国戦線に連れてこられた。彼女たちは軍の駐屯地に隣接した所に監禁され、毎日、多数の兵士のセックスの相手をさせられた。軍に生殺与奪の権を握られ、一切の自由を剥奪された。文字通り奴隷の境遇に置かれた。当然、彼女たちは毎日、泣き暮らして、地獄の日々を過ごしていた。こういった彼女たちとセックスをして、兵士たちはどの程度、癒されたのであろうか。

ニワトリのケージのような施設で彼女たちとセックスしても、そこに心のつながりは何一つ生まれなかった。彼女たちと人間同士としての交情がなかった。こんなもので、兵士たちの心が深く癒されたとは到底思われない。要するに、性的奴隷型の従軍慰安婦のリフレッシュ効果は極めて小さかった。だから、こういったタイプの従軍慰安婦が基本だったならば、八年に及ぶ中国との戦争は、途中で瓦解していたとまで私は考える。

後者のタイプ、すなわち、日本人町で暮らす売春婦型の従軍慰安婦がたまたま形成されたので、ようやく兵士たちの不満をなだめることができた。日本人町という方式は、たしかに金がかかった。六〇万人にもふくれあがった在留日本人の生活の面倒まで見てやらねばならないのだから、軍や国家にとって、大きな負担となった。反面、長期戦で

心身を消耗させた兵士をリフレッシュする方法としては拔群の効果を發揮した。こういった効果拔群の日本人町が二〇〇も中国戦線にできていた。とするならば、日本人町のほかに、限定的な効果しかない性的奴隷型の従軍慰安婦を用意する必要があったのだろうか。私はなかったと考える。

戦場は千差万別で決して一様ではない。まして日本軍は八年もの間、一〇〇万の大軍を中国に派遣し続けた。だから、あらゆる状況がありえた。性的奴隷型の従軍慰安婦が中国戦線にも存在したことは認める。しかし、それは少数の例外的なものに過ぎなかった。たとえば部隊が日本人町から遠く離れて駐屯していて、日本人町を利用しにくい場合や、あるいはまた、部隊の性格から秘匿することが求められ、軍機上、日本人町を利用できない場合などが想定される。こういった場合には、中国戦線においても、やむなく性的奴隷型の従軍慰安婦を利用したかもしれない。しかし、一般的には兵士から歓迎され、効果もはつきりしている日本人町にいた売春婦型の従軍慰安婦のほうを利用した。前述したように種々の理由から、太平洋戦争期、東南アジア方面に日本人商人は多く出かけなかった。そのことから、この時期、東南アジアでは性的奴隷型の従軍慰安婦が相当程度、存在したであろう。しかし、中国戦線では性的奴隷型の従軍慰安婦は少数の例外的な存在であり、売春婦型のほうが一般的であった。

軍として、はじめから意図したわけではなからうが、長期戦の遂行に極めて有効な方式を結果的に作り出したことになる。日本人町が多く中国戦線に形成されたことで、八年におよぶ長期戦にもかかわらず、兵士の大規模な反抗や反乱は起こらなかった。なんとか兵士の不満をなだめてゆくことができた。

結 び

幾何の問題では、一本の補助線を引くことで、たちどころに解が得られる。今回、従軍慰安婦問題の解明のために、日本人町という補助線を用いた。中国戦線に二〇〇ぐらいの日本人町が作られる。そこに、日本内地と同じようなタイプの売春婦がいて、兵士の相手をした。彼女たちは売春婦型の従軍慰安婦であった。

かつて私は、従軍慰安婦には売春婦型と性的奴隷型の二つのタイプがあること、そして、性的奴隷型は一九四〇年頃になって、朝鮮人女性の間だけにだけ出てくると主張した〔倉橋正直『従軍慰安婦問題の歴史的研究』、共栄書房、一九九四年〕。今回、中国戦線に多くの日本人町が作られたことを指摘し、それに分析を加えた。結果として、私の従来の説を補強するものになった。したがって、私としては以前の説をそのまま主張するものである。

注

(1) 単位は千人。千人以下は四捨五入。朝鮮人・台湾人を含む。張家口一九、大同七、厚和四、北京八三、天津五二、唐山三、

蘆台四、石門一三、新郷四、太原一五、青島三一、濟南一九、徐州八、開封七、南京二二、上海八三、漢口一〇、廈門九、
広東一二、(前掲『第七回新支那年鑑』、一〇九頁、「主要都市別在留日本人数」)

(2) 「満州に三万戸の『転業村』、来年の明治節に家族同伴入植」(『朝日新聞』、一九四〇年二月八日)

(3) 転廃業者を、「満州開拓民」として送り出すだけでなく、中国や東南アジア方面へ移住させることも、行政は推進していた。

「(4) 支那南洋その他海外への移住進出。大東亜共栄圏の確立を図るためには、支那南洋等への我国民の移住進出を促進することが必要である。そこで転廃業者の転換先としても、支那、南洋その他海外への移住進出を指導し、以て我国海外繁栄の礎石たらしむることが必要であると思はれる。」(商工省振興部長 豊田雅孝著『産業国策と中小産業』、「戦時経済国策大系、第一〇巻」、産業経済学会、一九四一年一月。「復刻版、日本図書センター、二〇〇〇年」。四二三頁)

(4) 開封日本商工会編『開封商工案内 附 帰徳・新郷・彰徳』、一九四二年二月、一二六＋七一頁。開封。／済南日本商工会議所編『済南事情』、一九三九年六月、五五四頁、大阪。／広東日本商工会議所編『広東日本商工名録』、一九四二年九月、一九八頁、広州。

(5) (人口) 総計七〇七一人。内訳。内地男二八五六人。内地女二〇二二人。日本人合計四八七八人(六九%)。朝鮮男一〇五三人。朝鮮女一一三八人。朝鮮人合計二一九一人(三二%)。台湾男二人。

(職業) 風呂一、理髪二、髪結い五、按摩一、撞球場三、映画館二、劇場一、旅館二、貸間三〇、下宿三、アパート七、葬儀社一、衛生社二、貸しボート二、タクシー一、花弁業一、牛乳販売一、紹介業三、家政婦斡旋一、代書二、古物商七、古衣一、和洋菓子二三、薬種一五、医院四、歯科医院五、産婆三、写真撮影一八、写真機材料二、タタミ屋五、ガラス屋一、レンガ製造二、レンガ販売一、時計屋一、楽器一、豆腐製造七、納豆製造三、鮮魚八、海産物二、青果二、精肉二、清涼飲料五、アイスクリーク八、氷六、サイダー製造一、洋服仕立て七、和洋服仕立て三、洋服店七、呉服八、洗濯九、自転車販売一五、自動車修繕二、質屋一二、薪炭八、印刷三、タバコ二、広告七、料理店三三、カフェー一二、飲食店八一など。

(6) 敗戦後、四九万人の中国在留日本人はリュックサック一つで、命からがら引き揚げてきた。それまで中国で築いた資産はすべて置いてこざるをえなかった。彼らは戦争中、占領軍の威を借り、中国民衆の犠牲の上に比較的恵まれた生活を享受していた。結局、このような形で、そのツケを支払わされたのであった。

(7) 前稿で、中国語で記された史料のうち、「咖啡館三戸」を、私は不用意にもコーヒー店と翻訳してしまった(五六頁)。これは誤りであった。「カフェー三戸」と訳すべきであった。カフェーの両義のうち、女給という売春婦がいる売春の場のほうである。現在の喫茶店に当たるとなるようなコーヒー店が、この時、凌源県域に存在するはずがなかった。

(補注) 開封日本商工会編『開封商工案内』は、岐阜県各務原市の西厳寺の小川徳水師のご尽力によって利用することができた。このことを、ここに記して、感謝の意を表するものである。

